

和歌三首並最花青銅百疋獻之。秋日陪八幡社寶前三首和歌。

社頭月

みしめ引濁をはらふ神垣は月のひかりもことさらにこそ

水上月

見る人のこゝろもすめる石清水きよきにうつる月の光を

寄松祝

のどけしな民の草葉も動きなき山松が枝の千々の秋かぜ

今夜雨降り待りけるまゝ。

さりととも月のひかりを松山に思ひかさなるあきの雨雲

仰ぎ見て忍ぶぞ佗し夜半の月匂へる影もあらぬくも井を

待えつるこよひ最中の秋風もむなしく雨の音のみぞする

宵の程過る頃、雨少とばかりはれて、月の光かすかにうつ

ろひみえ待りけるまゝ。

晴やらでうつろふくもの光こそ中々月のつらきなりけれ

空や又今宵は月の十日あまりいつかと待ちし月も曇らぬ

くるゝ間を急ぎし山のかひもなく最中の秋に曇る月かな

おもへども只大方の月にさへくもるはつらき習なりしを

一、持明院基時卿御筆の軸出來

十六日。基時卿御筆の掛軸今日出來す。則觀月亭に掛て拜見之。高光詠歌也。折から情にうかべるまゝ書之。

ながらへてまよふ現に思ふ哉うらやましくも過し世の夢

月に對して詠

みちにける光は過し世の中のことはりしるくすめる月哉

吳竹のよふかき窓にしたひ見る光もさびし十六夜のつき

等閑に誰か忍ばんしの竹のよにいひしらぬいざよひの月

一、本多政冬と仲秋贈答の詩

本多政冬、仲秋の作一首を被贈。其詩云。

雖值秋天三五夜。浮雲靈豔雨猶寒。知微已經吳剛去。誰

使月明子細看。

拙和

江山此夕烟雲暗。城外鐘聲帶雨寒。窻下空懷桂花形。何

時清夜與君看。

一、新雁の飛ぶを見て

二十一日。薄暮の頃新雁二翼、北の空より南に飛ぶ。折を

たがへぬいとをかしくこそ。

さびしさはいづこも同じ夕暮を秋に浮れて雁の來ぬらん

虫の音打しめり、物さびしさの餘り。

秋さむき枕の窓の月かげにいつしかよするまつむしの聲

露も今霜とや結ぶ葛の葉のうら枯れわたる夜半の虫の音

一、忍草を贈られたる返し

二十七日。重正丈、忍草たうべける消息の返しに。

うつし植てなほこそ忍べ忍ぶ草君が軒端の秋のけしきを

一、觀月亭即事

九月五日。觀月亭前即興。

池水悠悠秋已寒。滿庭黃葉倚欄看。蕭々綠竹長松下。獨

坐寂寥心自寬。

一、重陽の宴の意を

かざすべき千とせの秋もしら菊やけふ長月の九重のには

一、獅々御藏の鏡

是日平岡五左衛門親仍、獅々御藏御箱の鏡十四上之。是は

微妙妙御封の故也。於御前某奉之開封也。鏡鏡にして御封

の所下を革にて包之、其上に御封有之。十四の内三の二計

りは御封朽損する也。年月久遠の事故其昔を思ふに、如此

於御前開封事は、不思議にも又空恐敷も奉存也。

一、後の月を詠めて

十三日。今夕御城内松城を下りてゆくに、月林頭に輝き且

飛泉の音自ら清涼たり。不堪感興。樹下に立より林間の月

を見る。今しばし見まくほしかりしかども、私ならねばこ

ゝろとめて立去ぬ。

秋深き木の間の月のあはれさを心の儘に見るよしもがな

於觀月亭

浮雲を四方につくして長月の名におふ影のをしき空かな

一、利休門下の七人

千宗室へ利休門弟の内、殊に美名有之七人の事尋候處、此

事は近代の人の稱する所也。凡當時は大小名となく、皆以

て門弟たるよしなり。近代所稱七人は、故肥前守様・浦生飛

彈守・金森法印・古田織部・高山南坊・芝山監物・勢多掃部此

七人也。

一、君恩肝膽に銘す

二十六日於奥書院二の間、生駒右近・葛卷平次郎並某三人

へ筑後・信濃列座にて、筑後を以被命候は、向後御奥小姓組

被指除候。組付無之列に被仰付候。此段可申渡旨被仰出候。